

2. 談話会 30 年の歩みに思う 寺澤 芳雄（東京大学・岐阜女子大学名誉教授）

中世英文学談話会の第一回例会は、1955 年 1 月 22 日 明治学院大学において開催され、最初の研究発表は繁尾久氏「アングロ・サクソン文学展望」であった。当初は会するもの 10 名前後、月例を原則としながらも不定期になりがちであったが、次第に月一回規則的に開かれるようになり、会員の層も序々にひろがっていった。1963 年 10 月～ '65 年 5 月の間、大学紛争の煽りを受けて中断することがあったが、1965 年 6 月から例会を再開し、同時に『中世英文学談話会会報』を創刊することができた。この時点で、会員数はすでに 60 名を数え、1975 年には 166 名、現在は 264 名の会員を擁するに至っている。本年は、第一回例会の開かれた 1955 年から数えて恰度 30 年、人の年令でいえば而立の年を迎えたことになる。この節目に、我々の談話会が関西の中世英文学研究会と合併し、新しい「日本中世英語英文学会」として発足することになり、談話会創設当時のメンバーの一人として感慨なきをえない。

30 年の歴史をもつ中世英文学談話会の性格はどういうものであったろうか。研究を志す者の集まりである以上、「中世英語・英文学の研究の促進を目的とする」（旧会則 1）ことはいうまでもないが、“談話会”という名称がよく表わしているように、informal であることが大きな特色であったと思う。そのことは、「毎月一回の例会を開き、研究発表と会員相互の親睦を図る」（下線筆者）という旧会則 3.1 に明らかに示されている。研究資料に乏しく、海外の情報の入手もままならなかった当時、中世英国の言語と文学に魅せられたものが相集い、情報・資料を交換し、またさらに若い研究者を誘って発表の機会を提供することを心掛けていたように思う。しかし、上に記したとおり、会員数が次第にふえ、専門分野の上でも、地域・年令層の面でも大きなひろがりをもつようになると、この集まりを組織化し、一つの全国的な学会にすべきではないか、してほしいという声が聞かれるようになった。その一つの顛れは、1967 年に日本英文学会大会が東北学院大学で開催された際計画された「中世研究者の集い」である。これには 60 余名の中世英語・英文学研究者が参会したが、その折の最大の話題はこの学会問題であった。この時の発言では、その必要性は認めながらも、なお時期尚早とする慎重論が優勢だったように記憶する。この学会問題は、その後も幾度か、幹事会あるいは会員の間で議論されながら、容易に進展をみなかったのは、談話会と中世英文学研究者をめぐる事情もあつたけれども、談話会本来の informality に対する未練もその一因だったのではないであろうか。『会報』No.18 の編集後記で、当番校幹事が次のように記しているのも、同種の考えを反映するものであろう。「... その一方で、“談話会”という名称にこめられた当初からの会の性格も、これはやはりいつまでも維持していつてもらいたいと切に思うものである。研究発表会・特別講演会もあくまで談話会的雰囲気の中に行われるものであつてもらいたい。」 informality は一つには柔軟性につながるものである。新しい学会が、硬直した制度化の弊に陥らぬよう、この informality の精神が何らかの形で継承され、安全弁として機能してほしいと思う。

最近欧米における中世英語・英文学あるいは英語史の研究にはめざましい多様化と進展が見られ、わが国における研究も、世界の斯学研究の一環としての役割が期待されている。このような学界の状況の中で、狭い日本の中に共存してきた二つの中世研究グループが一つの学会に統合されるのは、自然の勢いであった。談話会から学会への移行が、我々個々の研究者の研究を促進するのみならず、時に個人の枠を越え、あるいは国境を越えた共同研究を促し、中世英語・英文学研究あるいは英語史研究の発展に資することを希うものである

我々はまた、中世英国という特殊な時代を研究対象とするに当って、狭い視野に止まり、独善に陥らぬよう、自戒したい。従来談話会あるいは中世英文学研究者の間で、自家中毒的傾向が全くなかったとはいえないであろう。学問研究における *localism*, *provincialism* に陥らぬために、我々は自己の特殊研究を、今日の世界の学界における英語・英文学研究の中に位置づける努力を怠ってはならないと思う。また、我々の窮極の目的が、中世英国の人々が如何に考え、如何に感じ、如何にこれを表現したかにあるとするならば、中世英語・英文学の問題を考えるに当って、これを中世英国の社会・文化さらには中世ヨーロッパの文学・文化の展望の下におく広い中世研究の視点も忘れてはならないだろう。

[付記：「中世英文学談話会会報」22号（1984）より寺澤芳雄先生の許可を得て転載；肩書きは2005年4月現在；インターネットの制約上、原文の圏点を下線に改めた：日本中世英語英文学会小史編纂委員会]